

隔月連載

「イザベラ・バードの道」を現代に活かす

第3回

地形と地質そしてケプロンの評



『日本奥地紀行』ルート図
 (『イザベラ・バード紀行』伊藤孝博著、無朋舎出版、2010年)

辻井 達一 (つじい たついち)

財北海道環境財団理事長

窪田留利子 (くぼた るりこ)

イザベラ・バードの道を迎える会事務局長

ここまで、イザベラ・バードの見た植物と動物について扱ってきた。この第3回では地形と地質をテーマにしようと思う。これは植物や動物の生育のベースとなり、大きくは風景のベースとなるものだ。

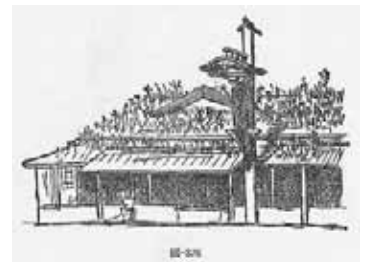
1 地形と地質

イザベラ・バードの記述には、火山としては渡島駒ヶ岳と樽前山が出てくる。駒ヶ岳はその秀麗な山容が目を引いたらしい。樽前山のほうは1874(明治7)年つまりイザベラの訪れる4年前に噴火した直後だから、まだ、火山灰を被って間もない山腹の樹木が立ち枯れている情景が次のように描かれている。



現在の樽前山(辻井達一)
 (プリン型ドームは1909年の噴火による)

私は苫小牧に正午に着くことができた。ここは広くて淋しい^{さび}ところで、家屋の屋根には芝土が盛っており、雑草がぼうぼうと生えていた。この近くに樽前火山がある。静かそうな灰色の円錐山で、その麓は何万



苫小牧の旅館、明治11年8月頃
 『日本その日その日』E・S・モース著
 (東洋文庫 平凡社発行引用)

本という枯木におおわれている。長年の間あまり物静かで灰色に見えたので、人々はこの火山は永久に休んだものと考えていたが、最近のある蒸し暑い日に、火山はその頂を爆発し、この地方一帯が何マイルにもわたって火山岩や火山灰におおわれ、山腹の森林地帯は焼きつくされた。苫小牧の土の屋根にもさらに火山灰が降り積もり、五〇マイルも遠く離れた襟裳岬^{えりも}にまで細かい火山灰が降った。

室蘭から佐増^{ささふと}太まで、いたるところ新旧の火山活動の痕跡がある。軽石、石灰華^{れいせいかん}、礫岩、ときには固い玄武岩の鉱床があり、白老から東方のすべてを最近の軽石で覆っている。



イザベラが、いわば生きた、新しい火山というものを
見たのはこれが初めてだったのではないかと思われ
れる※1。

さて、イザベラは帰途でもかなり樽前山をはじめと
して火山活動に言及している。

明らかに北海道のこの地方（白老付近）の地形変化は比較的
最近のものである。それらの変化をもたらした原動力は今なお死
滅していない。この地方の海岸全般にわたって陸地が海から二、
三マイル盛り上がっている。もとの浜辺は入江
や岬の姿を留めて、この
地方の景色の目立った
特色をなしている。



萩野のシレットコ。写真上部が海に突き出した岬だった。
(白老町：萩野の自然公園案内板より提供：新岡幸一)

これはおそらくは白老、萩野あたりの景色からであ
ろう。萩野のシレットコなどはまさに岬そのものだから。
そして新しい火山現象についてはこうだ。

この新しく形成された陸地は軽石の広大な床となっているよう
で、植物質の土の薄い層でおおわれており、五十年以上は経てい
る筈が**ない**。この軽石は白老から非常に近い樽前火山が爆発し
たときに降ったもので、また海から打ち上げられたものの他に、
大量のものが内陸の山々や谷間から数多くの川によって運び出さ
れて来たものである。最後の爆発のとき、この地方に軽石は平均
三フィート半の深さまで積もった。ほとんどあらゆる川で、この地
層形成の良い断面図が見られる。深い割れ目のある土手には広く
て明るい色の軽石層が、上部は数インチの肥沃な黒い植物質の
土壌で、下部が数フィートの黒い海砂になっている。私が白老に
泊まった最初の晩に
増水があった。この大
水で、内陸部の山々
から軽石が一五マイル
も押し流されてきた。
たった一本の川なの
に、この軽石の沈殿



『北海道歴検図 胆振州(下) 白老 距箱館54里35町/ 目賀田帯刀』(北海道大学附属図書館蔵)

※1 樽前山の噴火

樽前山の噴火は何度も繰り返されている。17世紀以降で
は、1667年、1739年、1804年、1817年などがあり、その後、
1874年噴火の後の状況がイザベラ・バードの記録に出てく
るものだ。イザベラは1878年8月にその麓を通っているから、
まだ立ち枯れになった木々を生々しく眺めている。

物は、九インチの厚さまで地面をおおってしまった。

内陸の方を眺めると、右手には樽前火山が聳え、灰色の裸の
頂上と枯れた森林を見せている。

こうした情景は現在でも見られることだ。

この火山噴出物は先にも述べたように1874(明治7)
年の噴火によるものだ。したがってイザベラがいう
「五十年以上は経っているはずがない」というのは正
しいし、彼女が土地の人に聞けばすぐにも正確な返答
が得られたはずだ。

白老ではわざわざ本道から離れて(としか思えない)
白老川を遡り、噴火にともなって湧出した温泉を見に
行っている。興味津々というところだ。この時には例
のガイドの伊藤は連れていない。彼は御免を蒙って白
老の宿で骨休みを決め込んでいる。興味がなかったの
だろう。

温泉をイザベラは初めて
経験したのだろうか。アメリ
カ旅行ではロッキー山脈
を歩いているから、たとえ
ばイエローストーンで見
ているかもしれない。またハ
ワイで遭遇しているかもし
れない。このあたりは筆者
が彼女のロッキーやハワイ
での足取りを知らないから
なんとも言えない。



白老川上流 滝野温泉跡
(窪田留利子)

日本では北海道へ入る前に、日光から鬼怒川を通っ
ているのだが、鬼怒川で温泉に入ったとは記されてい
ない。東北地方ではこの後、会津から新潟、秋田、青
森のルートで温泉のことに詳しくは触れていない。浅
虫温泉もルート沿いにあったはずだが。すると、白老
での温泉探訪というのはイザベラにとってはかなりわ
くわくする想いのものだったかも知れないではない
か。この部分で彼女はこう記しているのだ。



私はすばらしい一日の大半を過ごして、調査したり、あるいは火山の裏側に回って内陸部から登ろうとした。見るべきもの、知るべきものがそこに多かった。ああ、私にもっと元気があったらいいのだが！それは何時間もの退屈な、しかもくたびれはてしてしまう仕事であった。ようやくある地点まで来たが、そこには大きな割れ目が数ヶ所あって、煙と蒸気を噴出し、ときどき地下から爆発音を立てていた。この爆発音は、ひどく煙を出している小さな側面の割れ目のそばから出ていた。

平取でイザベラは“食べる土（チェ・トイ、珪藻土）の谷（ナイ）”のことを記している。これが、現在のどこの場所に当たるのかは不明である。確かめることができれば面白いだろう。彼女の記述はこうだ。

今述べた食物のほかに、パテのような粘土から作った濃いスープがある。この粘土は一、二ヶ所の谷間から産出する。これは、野生の百合の球根と一緒に煮て、粘土の大部分が底に沈むまで待って、非常に濃い上澄みを汲み出すのである。北海道では、この土を産出する谷間をチェ・トイ・ナイと呼ぶ。文字通りの意味は「食べる土の谷」である。

ところで、函館への帰途の白老－室蘭－伊達－有珠－長万部－森－函館への噴火湾岸を辿るルートでは、しきりに樹木の名前が出てくる。有珠の善光寺では、櫟くぬぎの木、そして例の難所の礼文華峠では、

杉の森林は深い影を落とし、真っ赤な楓の枝葉や、真紅ぶの葡萄ぶどうの花網が、暗闇を明るく照らしている。内陸の景色は無限を暗示していた。森林におおわれた山々には果てしがなく、光を通さぬ峡谷には底知れぬものがあるように思えた。……特に美しい銀杏いちじょうの木は、小さな扇形の葉をつけ、一面に蔓草たけやぶが絡んでおり、低くて黒い葉をつけた竹藪たけやぶから突き抜けて聳えている。



有珠善光寺
推定樹令250年の銀杏記念保護樹木がある
(窪田留利子)



現在の礼文華峠古道
(窪田留利子)

ここで私は、一本の大きな銀杏の木を見た。高さは地面から三フィートで、八本の高い幹に分かれ、どれも直径が二フィート五インチ以上であった。この木は早く生長し、わが英国の気候



カツラ *Cercidiphyllum japonicum* (辻井達一)

によく適応しているのだから、ロンドンのキュー植物園で誰も見られるようにどうして大規模にとり入れられないのか、ふしぎである。この他に球形の葉が対になっている木があり、非常に大きく生長している。

これは明らかに（ブラキストンが指摘しているように）イザベラの見間違いでカツラを見誤ったものだ。イチヨウの大木が自然にこのあたりで生えていることはあり得ない。か。ひょっとしたらたとえば善光寺などは早く入っていたかも。「高さは地面から三フィート（約1メートル）で、八本の高い幹に分かれ、……」というのもカツラの性状と一致している（トーマス・ブラキストン『蝦夷地の中の日本』P.341～342^{*2}）。すると、この文章の最後に出てくる「球形の葉が対になっている木」は何だろうか。これこそカツラの特徴なのだが、それ以外で一番、近いのはハクウンボクくらいだが、その葉は対生ではなくて互生なのだ。

こうした間違いは、別のところにもある。平取での記述（第36信）の中で佐瑠太から平取へのルートで、

森林の樹木は、ほとんど神樹 (*Ailanthus glandulosus*) と櫟 (ケヤキ *Zelkova keaki*) だけである。

としてあるのは、両方共に間違いで、シンジュ（神樹）はまだ北海道へは移入されていないから多分、葉の付き方からしてオニグルミ、ケヤキは明らかにハルニレの見間違えだろう。観察眼というより植物分布の知識の欠如だ。

帰途の長万部から森を通過して函館へのルートでは、

※2 トーマス・ブラキストン (Thomas Wright Blakiston, 1832～1891)

英国ハンプシャー州出身の動物学者であるとともに、軍人、貿易商、探検家。幕末から明治期にかけて函館に滞在、製材業に従事、日本初の蒸気機関利用の製材所を運営、貿易商としてはブラキストン札と呼ばれた紙幣を発行するなどした。採集した鳥類標本はブラキストン・コレクションとして北大に所蔵される。1880年、ブライヤーとともに「日本鳥類目録」を出版、1883年、津軽海峡に動物分布境界線存在の見解を発表、ジョン・ミルン (John Milne、開拓使お雇い外国人) の提案でブラキストン線と呼ばれることとなった。



森と蕁菜沼との間の森林は、私が前に見たときには、陰鬱な暗い日だったので、とても美しいとは思わなかったが、今回は、太陽は輝き、光と蔭が豊富に模様を作り、紅葉した樹木や真紅の蔓草が多く、谷間には燃えるような紅葉があり、色彩の音楽で私を楽しませてくれた。峠の頂上から眺めると湖の向こうには、裸の火山の壮大な全景が見える。溶岩の床と軽石の野原があり、その麓の森林の間に大沼・小沼・蕁菜沼が横たわっている。もう一つの山の頂上からは、風の強い函館の驚くべき景色が眺められる。その町の岬はジブラルタルのように見える。この山の斜面は、アイヌが毒矢の原料を作る日本とリカぶとと草で覆われている。

オニグルミ *Juglans ailanshifolia* (辻井達一)

小沼から眺めた駒ヶ岳 (金澤晋一氏)

雪の峰から見た函館の風景
『ペリー-日本遠征記図譜』京都書院アーツコレクション引用

「紅葉した樹木や真紅の蔓草」とは何だったのだろうか。あるいは駒ヶ岳山腹のナナカマドであろうか。あるいはまたヤマウルシであったかとも思われる。そして真紅の蔓草とは間違いなくツタウルシのことを指すものだろう。

ツタウルシ *Rhus ambigua*
(辻井達一)ヤマウルシ *Rhus trichocarpa*
(辻井達一)

2 ブラキストン、ケブロンなどによる自然観察の記述とイザベラ・バード

トーマス・ブラキストン
(函館市中央図書館蔵)

ブラキストンは先にも記したように、イザベラの観察をかなり冷やかに批評していて、いくつもの間違いを指摘している。これは、まあ、当然のことでもあろう。何しろ彼はほとんどプロなのだから。カツラをイチョウと見間違えたのだろう、と書いているのは先に挙げたが、平取にたくさん生えているカシワをシンジュ (*Ailanthus glandulosus*) と見間違っている、と述べている。これは確かに少々、ひどい誤りだ。

ブラキストンはイザベラが、

彼女が言うシンジュが、「山藪すなわちシンジュサンによってすっかり食い荒らされていた。柏木のみが茂っている林を通ったが、葉はだいぶ山蚕に穴だらけにされていた。」という記述を、「植物学の辞書には、シンジュはカイコ (シンジュサン) の好物である、と書いてあるのにそっくりそのままだ、しかし、北海道には神樹も分布していないし、シンジュサンも居はしない」(トーマス・ブラキストン『蝦夷地の中の日本』参考)

と皮肉っている。

リヒャルト・ガルトネル^{※3}のほうはイザベラの北海道到着以前(明治4年/1871)に既に函館を後に帰国しているから彼女と会ってはいない。しかし、彼が残した七重の農場は開拓使に引き継がれて七重官園つまり北海道最初の農業試験場になっていた。イザベラが函館からの途中で少なくとも通っている。ガルトネルの造ったブナ林は道の脇だからこれも見ているはずだが彼女の日記には記述がない。あるいはブナを知らなかったものか。

※3 リヒャルト・ガルトネル (Richard Gaertner)

プロシヤ (ドイツ) 出身の貿易商で函館に滞在、七飯で農場を経営、土地300万坪 (約1,000ha) を1869年に榎本武揚の蝦夷共和国政府と99年間の租借契約を締結、明治政府は1870年に賠償金を支払って契約を解除。これがガルトネル事件と呼ばれる。七飯の農場は後に開拓使官園 (農業試験場) となった。七飯に彼が植えたブナ林はブナ人工林としては最初のもので、現在、保護林となっている。



ホーレス・ケプロン^{※4}は1872年（明治5）6月末に、函館から森まで、ほぼイザベラと同じルートを經由している。このレポートの頭書で、いわば専門家として（彼はアメリカ農商務省の長官という職にあって、農業問題・植物・作物について詳しくだった）の見識から、イザベラへの手厳しい論評を行ったことを記したが、ここではそのことを敷衍して述べようとは思わない。

ケプロンがその旅行で見て、日記に記した函館→森、そして勇払→富川というイザベラのルートと重なっている部分についての彼の記録を見ることにしよう。

まず、大沼付近の描写はこうだ。

この円錐形の火山（駒ヶ岳）のすぐ麓には美しい二つの湖があって、火山と同時にできたものである。湖は非常に美しく、ぐるりは小高い山で囲まれている。どの山も火山側を除き、大きな木の生えた素晴らしい林や豊富この上ない野生の花で一面に覆われている。この中には高さ四十フィートになり、多数の花を付けたモクレンがある。また、野生のスイカズラ、ツツジ、藤、それに房をなす白やピンクのバラがある。確かに、これほど



七重町の官園 明治10年頃『写真帖』（函館市中央図書館蔵）



七飯町のゲルトナブナ (*Fagus crenata*) 林 (辻井達一)



ホーレス・ケプロン『晩年のケプロン』（北海道大学附属図書館蔵）



ノイバラ *Rosa multiflora* (辻井達一)

豪華な、あるいは完璧な木や花は今だかつて見た事がない。実に、これに匹敵するものは、イングランドとアイルランド以外、決してどこにもないだろう。

蝦夷の島の、この近くの植物には何か説明し難いものがある。非常に寒い気候だといつも言われてきた。そしてトーマス・アンチセル^{※5}は報告の中で、これを亜寒帯の地としている。どこからアンチセルがこのような結論を出したのか、まだ確かめようがない。確かに亜寒帯の気候が島の植物へ及ぼす何かの影響とか、あるいはまた、今までここで観測した気象上の記録によるものでは決してない。



トーマス・アンチセル『開拓使顧問ケプロンその他の御雇いアメリカ人』（北海道大学附属図書館蔵）

温度計の最低昇降較差が零度になったことは、めったになく、土地が地下十二インチまで凍ることは珍しい。一方、野菜の生長、標高の高い山に生える樹木、花を付ける灌木や喬木は、むしろ亜熱帯の気候を示すと言えよう。私自身、高い山の上で三十フィートもあるモクレンに花が咲いているのを目にした。土壤の温度はもっと高いはずだし、私は実際そうだと思っている。なぜかと言えば、この季節（6月）になってからの低い温度を見ても、気候が温和なことを示しているようである。たまたに寒暖計が日陰で（華氏）七十五度を超すが、ここではサンフランシスコのように海風のことを考えなければならない。遙か北の山脈で守られた低い土地では、間違いなく気候はずっと暖かいはずである。

群れをなすバラ、ツツジ、スイカズラ、藤、モクレン等の豪華な彩りと計り知れぬその量。（ホーレス・ケプロン『蝦夷と江戸』）

ここに繰り返し記されているモクレンは、きわめて注目される。これはおそらくはキタコブシかホウノキのことだろう。あるいは両方共であるかもしれない。上に述べたようにケプロンがこれを記したのは6



キタコブシ *Magnolia praecocissima var. borealis* (辻井達一)

※4 ホーレス・ケプロン (Horace Capron, 1804~1885) アメリカ、マサチューセッツ州出身。アメリカ農務省（農商務省）農務局長。1871年、黒田清隆の懇願によって開拓使お雇教師頭取兼開拓使顧問として来日、1875年まで滞在。北海道開拓計画を立案。

※5 トーマス・アンチセル (Thomas Antisell) アメリカ農務省出身。ケプロンと共に開拓使教師、顧問として来日。札幌農学校教授となる。農学、化学、気象学。北海道ではホップ（カラハナソウ）を発見、ビールの製造に使えるのではないかと考えたといわれるが定かではない。



月だから、よく目に付いたものと思われる。ここで言うモクレンについてケプロンは2度目の北海道への旅行の時にも記している。

結構な朝食の後、午前六時五十分、大野を出発した。今朝の馬の旅は言いようもないほど面白く、また快適である。

モクレンや、もっと温暖な土地に生える、その他の植物が目に入る。特に数限りないキンポウゲは、幾つかの高い林木の頂上まで、まるで帽子ほどの大きさの白い花の房になって、一面に付いている。最初見たときは、今まで聞いたこともない、何か花の咲く大きな木ではないかと思ったほどである。(ホーレス・ケプロン『蝦夷と江戸』)

これは明らかな間違いで、こんな蔓性のキンポウゲなど有りはしない。もちろんツルアジサイのことである。

ケプロンの記述は続く。



ツルアジサイ *Hydrangea petiolaris*
(辻井達一)

これらの物を見るにつけ、アンチセル教授が、その報告の中で、北海道の島を亜寒帯の地としようとは実に驚きである。また、いったいどうして、一般の人が、島の気候は入植にとって克服できない障害だなどという考えを信用するのか。実に不思議である。しかも、はっきりしたこんな証拠があるのにである。

土地全体が実に多種多様の野生の花で覆われ、そのすばらしさと言ったら、熱帯地方以外、世界中どこにも匹敵するものがない。(ホーレス・ケプロン『蝦夷と江戸』)

この記述では北海道の持つ、種の多様性の高さ、すなわちアメリカやヨーロッパに比べて遙かに豊富な植物組成を見事に見ている。そして北海道の夏の気温の高いことが、それを支えていることも見抜いている。

たしかにモクレン科の樹木の多くは温帯から暖帯に分布するから、温暖な気候の指標となり得る。しかし、この仲間はアジアとアメリカには分布するが、英国を

含めたヨーロッパには現生のものの分布がない。イザベラは彼女の旅行が8月であったから、その花を見る機会がなかった。もちろん、その特徴的に大きい葉（特にホオノキ）は見ることはあっただろうが、英国で見慣れていたわけではないから同情的に言えば、そうと見分けることはできなかつたとも思われる。このあたりはアマチュアの限界だろう。



ホオノキ (花) *Magnolia obovata*
(辻井達一)

ケプロンの言うアンチセル教授などの言説から与えられた誤った情報ないし観念については反論の余地はないだろうが、ここでしきりに出てくるトーマス・アンチセルという人は、アメリカ農務局のスタッフで、そもそもケプロン自身が推挙して連れてきたものだ。どういうわけか、ケプロンが嫌って（すると最初はよかったが、ということになるが）、こうした言及が出てきたものと伝えられる。しかし、むしろ逆で、ケプロンの北海道開拓の方針と合わない意見を述べたために嫌われるようになった、と見るべきではないかと思われる。

こうなると、当初に述べたようなアメリカ人の英国嫌いという単純なことからの言説ではなくて、ケプロンは自分の説に異を唱えるものは敵視した、とも言えるかもしれない。